

社会人が主体的な学びを始めるプロセス

—複線径路等至性アプローチによる検討

Process for working adults to begin independent learning

川崎裕子* 今城志保* 山田香*

Hiroko Kawasaki* Shiho Imashiro* Kaori Yamada*

*株式会社リクルートマネジメントソリューションズ

* Recruit Management Solutions Co.,Ltd.

<あらまし> 本研究では、社会人が主体的な学びを始めるに至るプロセスとその促進要因を、質的調査法の一つである複線径路等至性アプローチを用いて検討した。6名へのインタビューをとおして、学習のきっかけが発生する環境的背景や興味の持ち方の多様性、興味から学習開始に至るプロセスに見られる共通点、それらを促進する社会的な力などが明らかになった。

<キーワード> 成人学習、学び始め、複線径路等至性アプローチ

1. 問題と目的

社会人が学習しない理由として、「きっかけがつかめない」(内閣府, 2022), 「学びたいことが見つからない」(ベネッセコーポレーション, 2022)がある。川崎ら(2023)では、社会人の学び始めには、「仕事やプライベートで解決したい問題がある」という目の前の課題がきっかけとなる場合と、「なんとなく面白そうだった」という内発的な好奇心がきっかけとなる場合が同程度の割合で存在し、いずれも高い学習エンゲージメントにつながるという分析結果を得た。本研究は、どのような環境的背景のもとで学びのきっかけが発生するかや、きっかけから学習への興味が発生・発達し、学び始めるに至るプロセスについて、質的アプローチで探索することを目的とした。

2. 方法

2.1. データ収集

「ここ1年の間に、自ら興味をもって自発的に新たに学び始めたことがある」、企業で働く正社員6名に、2023年3月~12月に各1~2回のインタビュー調査を行った。対象者は、事前に行った定量調査において、学習内容と学習開始の経緯の自由記述に具体的な記載があった群から、性別、職種の偏りに配慮し選定した(図表1)。インタビューは3名で行い、図表1記載の取り組み内容について、興味をもったきっかけから学習開始までの行動

や気持ち、影響を受けた要因などを半構造化インタビューの手法で尋ねた。

2.2. 分析

まず6事例それぞれについて、行動・感情・認識を示すものを意味のまとまりごとに切片化し、時系列に配列した。次いで、複数径路等至性アプローチ(TEA)を用いて社会人が主体的な学びを始めるに至る径路の共通性と多様性を分析した。各切片の意味を解釈して抽象化して共通項や差異を探し、分岐点(BFP)、必須通過点(OPP)、等至点(EFP)などを設定し、統合的な径路図を作成した(図表2)。

3. 結果と考察

3.1. 結果

EFPとして設定した「自発的な学習の開始」に向けて、6名ともに環境変化、興味の発生、興味の発達、行動の選択の共通したステップが見られた。3つの異なる環境変化が最初の興味を発生させる刺激となること、そこには時間や資金の余裕や自分の今後を考える機会といった条件が必要となることがわかった。

「今後のキャリア展望を考える機会」からは、「仕事に役立つことへの興味」「仕事以外への興味」と異なる2つの方向に分岐した。

最初の興味は、OPPとして設定した「情報探索」を経て発達するが、そこには多様性が見られた。一方、その違いを問わず全員が、最初の学習手段の選択にはあまり時間をかけず、タイムリーに学習を始めていた。

興味が発生してから学習の開始に至るプロセスを促進する社会的な力(SG)として、様々な形での職場や家族の奨励や理解、アクセスしやすい学習情報が観察された。一方、抑制する社会的な力(SD)はあまり語られなかつ

図表1 インタビュー対象者の概要

NO	取り組み内容	年齢	性別	学歴	職種群
A	消費生活相談員資格(国家資格)	39	女性	四大卒	営業サービス系
B	Linux認定資格	49	男性	院卒	生産技術系
C	情報処理安全確保支援士(国家資格)	29	女性	四大卒	生産技術系
D	NISA、株式投資	41	男性	四大卒	生産技術系
E	認定薬剤師資格	45	女性	四大卒	その他(医療)
F	社会保険労務士資格(国家資格)	51	男性	四大卒	企画事務系

